

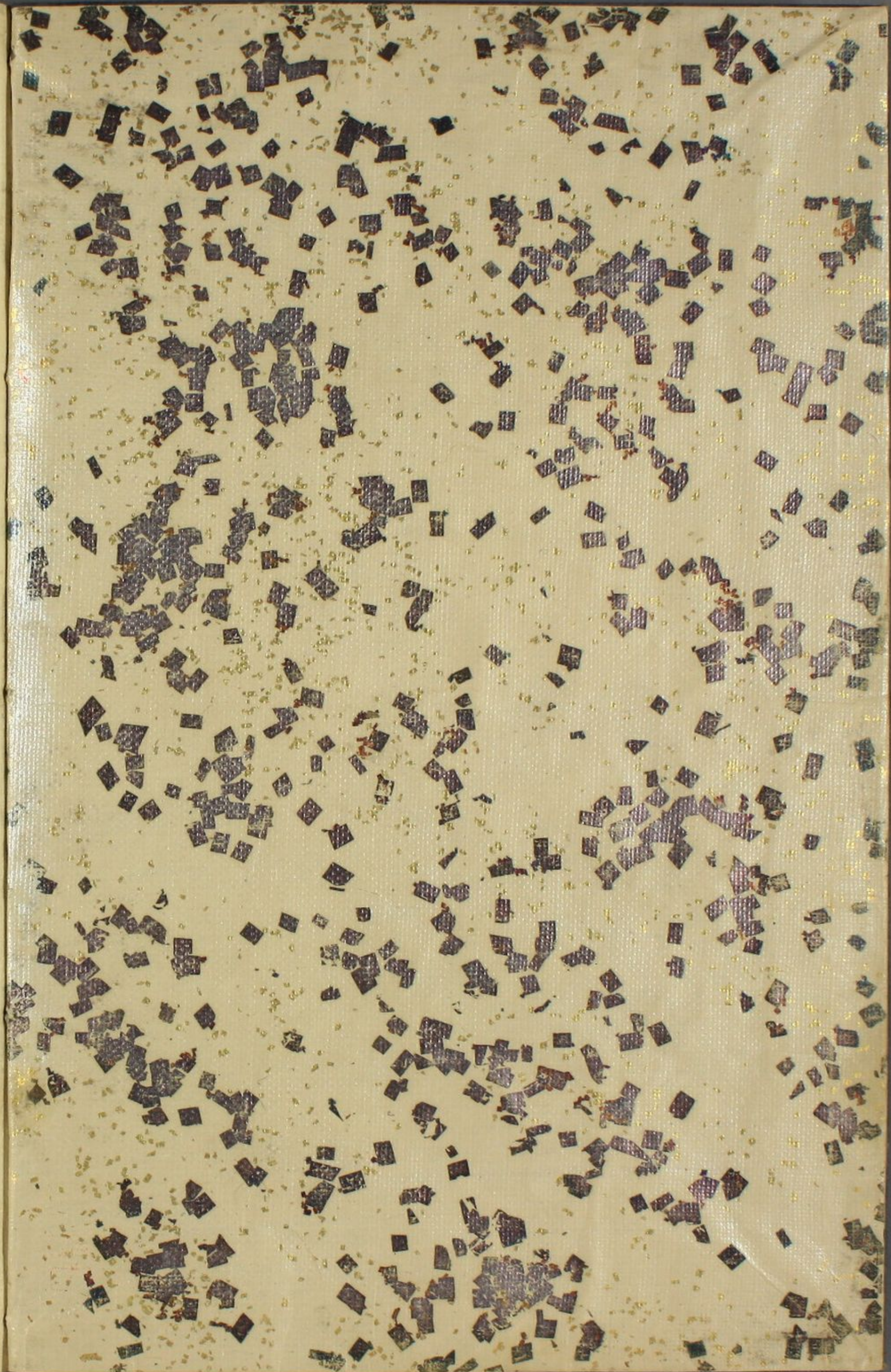


源氏辨了抄

五



天
啓
文
庫



末搦花

若菜並也。横望と魚より

源氏十七歳の二月より次年のままぐと牛也
春名寺と河也

まぐり花色とめおほよけ末搦花と神子あきらん
河云かの末つじ花りいひやたきりやうき江花
あより咲てまより搦中へまめ付より常陸宮乃姫さ
の鼻乃赤子論より實枝云は春史記の列傳の
と一人のまこといんむけし

いひまき
司馬相如以琴心挑卓文君より相如
妾のうれとらん之家のひひわろまめ挑戦と

いふは日一也

けらくまーりし

徳と云ふ 徳と云ふ事

ふくむくきたくふまふかなく乗願の

婦徳を記せり言て 夫の徳を記せり

一子らみけり世の 徳を記せり

て世根の徳人く 徳を記せり

世との徳か 徳を記せり

ふくむくきたく世の 徳を記せり

ふくむくきたく世の 徳を記せり

一世と云ふ世の 徳を記せり

いふは日一也

いふは日一也

いふは日一也

いふは日一也

いふは日一也

いふは日一也

いふは日一也

いふは日一也

いふは日一也

いふは日一也

とんり

あつらひくもふたれ

類 仙傳抄 覆がた 細流

師云 女の貞節をたゞく源氏君とよむるげのむきけがらす
へきはあつらひくもふたれ 一きまの節義すまを
らすくして後す 記すまあはきまも何らとや
世との人の心と及ぶらとの二まで中康
のなま叶いすれや

名流ひれ物とされ 是も源氏を照て半り好むまの物
志とえー 流るゑと一 万結小容色も天下一の片流
より留れ片流乃好色と半らりいふあら智者も好色

とんり

かんごうりのき部の大捕

和秘抄云王孫の人

が老部大捕も成らるるや 河海云らわの物流云

あて文の乳母よ一人のらんごうり一人の大武

のみま 王家無等偏之 世雄無等偏妙智無

等偏のいづごとく 九十年代後学女の弘安乃源氏

偏義より親がはる今 今之義を優義は定らん早

等すむい漢音くうごうの吳音く王の字下略

しつわとけいしを半音と勢は 王家無等偏
のめ字い王といふんけし

このめはらう人 師 源氏の乳母より大捕命
婦の好色する女とて半よりかやうのう乳
ののちあつては源氏のきこしきんめいれ
よりけりの末摘をとりけり

故常陸親王 故没故の字に死去せしと云

山養公云と総と野常陸のニケ國へ大守とて親王
の外に不狂也命と守とてみて法人の受領とす
花多云五十二代仁明才二歳子八歳の時兼和五年
正月任常陸守後五十八代孝天皇后より後
仁和二年八月廿八日崩御也

實枝云續日本紀第五曰兼和五年正月朔壬申
仁忠良親王為常陸太守後五位下藤原朝臣
貞公為命

仁明天皇 諱正良

忠良親王 世獻于常陸太守より五宮貞美親

是説のゆゑまれば花鳥の美我に誤らうへ

潜 易乾卦潜龍と云純の如いて

居て出ざらひそりけり神と云 至徳記

みづ乃友とて今つくまやうにわらん
一種と酒と云樂天が心忘ら友の詩酒也

白氏文集曰

今日北窓下

自問何所為

飲然得三友

三友者為誰

琴罷輒奉酒

酒罷輒吟詩

三友途相引

循環無已時

一彈繼中心

一詠暢四支

猶恐中有間

以醉彌繼之

三んでん

寝殿とて常の所之詩逢世卷子路寝と

あり酒は正寝也とあり寝殿のりや

あまれを人々をあまれ

琴乃多とすまら人乃ありや今をたらしと

花鳥云伯牙弹琴鍾子期知音

此の酒を昔物流るるを

大抵は昔物流ると云 花鳥の敏蔭が女 中忠木 十又

の年母死て娘一人跡より宿の皆覆て寝殿

アと野のやうに成りた殿は長由形ありて賀儀

まうでよけ家のおをさ流すお具し流す若少忠と

一は本立の酒をさ流す肉よりけ女よりけら格

のつよま立る人ありげよまきおよんがせげあ

作おとらやとさよあがされてか家の久きに若小

若いけ家よさまり流る荒れれせんあり一人の

つらひいしあるれんおあかりつくろふ人ささ

おれ之の者能て月ハ澤のりてうはせりてうまふて
とれえとやどせり録しん人さひやされて

虫はよもほまう勢せぬ浅茅せまひり候らん人を對し

かろのれなつれすう師云大うさ人の言はるは

つらうもえされば澤氏のどくがてむき律儀よか

て内證を義るらん人かりぬげあるを戒んるは磨

張瀧古り大寶箴雖冕旒蔽目而視於未敢雖

鞋續塞耳而聽於無声とより宝珠為旒而蔽目

い大人いこまうからことと見せぬなるね事の不取

えとらんのとと鞋黄色也續綿也以黃綿為之ぬ大

如橘トウチウ

あれと何とて一にさるまひい女のはりぬらうらん

命婦がめい好色中とて澤氏の好色をつとと畢竟

に同きんゆよとて一きこは初小盗人の大盗人と

つよは似たり人毎他人の悪すいこれ我方の悪

とぶとぬめのと君よ人の悪とんてもうかをつじ

むや

かりぎぬ師云縮まてとてうい将衣といふ布よてとてうい布

衣といつて下官のきうらと院泰とい皆将衣とめうらと

かかうら山 内裏日本紀源頼政が大園守護の武士

まて之位とのぞみやう子大内山の山守にともあり又
 名中の大内山仁和寺の西と帝王系畚の注あり
 遊別くくを 山養公云和泉大將定國はた大内時平
 の聲也定國はりて酒は多し和つてて文て時平の
 何とへは流りかたを驚かひに格とあげさうと生
 忠岑流勇とて松よりあぐさひまづき世せうとことと
 鶴のよむる橋の勢の上とを尊とよまはげとことと
 とうんの流とよむ時平のたぐ機嫌あとり和もすう家
 みきまつり大將の拍つき忠岑も禄流つたり大和
 後よ委 花白

厨つせはらぬわりのはかろくしきしをもおきおんを
 へー諫なる
 何くまで食へりうんまへ 阿順のはづりて諫
 けさき時わがくすて邪流は我まはて禍とある
 ののや
 大寶箴曰恐懼之心日弛邪僻之情轉放豈知事
 起乎所忽 猶生乎無妄 云無妄上思ヨラ又所ヨリ也
 よのつてわかれそて 中務君美上よ由むとやあぐ
 源氏よんごひけい教からうらうらうとや進退ま
 らいふくまると記して文徳人の戒とせり

人よもめてさるるふしや我づんよももあらん

あつまゝいよ思ふとすれば人よもめてさるる我が

心も好色乃名なはらて甚然すべしとて入りけり

をさあ道くされたそのもにさりて邪落とされぬ

い好道よら必何りもの飛也

催馬楽 呂 妹之門

妹が門せあが門ゆきこゝにてや昔ゆるに晴笠のひら

笠のぬもやうさるん空手田長あま宿り笠やどり

宿りてまゝらん田也

さしこつまり流るんをさるんを 實枝云々

袴向とてまにがり向や文章の外也

人のありはぬと大ぬるりやうはてす何つめ耳とぬ

流るるせの付

源氏の好色と命婦さうすら詞や空流るる

内の者と嫌て命婦さうあらはづく一記の

をこのとてい流るにさるく毛詩に惟此文王小

正翼のさかやうななりん記の也

ふいさつまでまゝらるる月のんいさま

まゝのいさつづくら一記の端まゝらるる月のあつら

るみくのたなやま記出らまゝい 未摘もの由り

後藤

敵^{たか}つら^{たか}深山の里^{深山}はび^{はび}き^きま^まて^ては^はま^まく^くよ^よん^んを^を記^記
わ^わざ^ざり^り 師云 膝行^{膝行}と^と事^事の^の大人^{大人}は^はき^きら^らく^くま^まつ^つら^らま^ま今^今の

世^世ま^まん^ん之^之足^足り^りと^とあ^ある^るに^につ^つく^くづ^づひ^ひて^て膝^膝ま^まて^てる^るま^まり^り也^也
午^午の^の會^會の時^時文^文甚^甚ま^まよ^よる^る時^時も^も膝^膝行^行して^{して}懐^懐紙^紙と^と云^云へ

え^えひ^ひの^の 河 衣^衣被^被香^香又^又裏^裏被^被香^香 任於^於麝^麝切^切書^書濃^濃也^也
麝 麝^麝龍^龍於^於及^及切^切

香^香字^字抄^抄云^云採^採栴^栴檀^檀樹^樹葉^葉皮^皮春^春節^節爲^爲香^香故^故云^云葉^葉皮^皮又^又

裏^裏香^香王^王家^家方^方有^有裏^裏衣^衣香^香 師云 裏^裏上^上云^云六^六半^半音^音也^也下^下略^略也^也

一^一云^云薰^薰衣^衣香^香ノ^ノ一^一名^名云^云 一^一云^云薰^薰物^物ノ^ノ惣^惣名^名云^云

衣^衣ニ^ニ裏^裏上^上ハ^ハ衣^衣ニ^ニ付^付ト^ト云^云心^心坎^坎又^又カ^カケ^ケ香^香ト^トモ^モ云^云リ

志^志云^云 新云

花^花名^名之^之云^云童^童部^部ノ^ノ讀^讀マ^マサ^サ言^言ト^ト引^引せん^んと^と紛^紛米^米

一^一云^云無^無言^言く^くと^とう^う為^為子^子鐘^鐘く^くと^とひ^ひて^て何^何も^も打^打

あ^あ〜[〜]一^一云^云後^後拍^拍を^をぬ^ぬき^きと^とす^すら^らと^と志^志ま^まと^とい^いふ^ふは^は也^也

志^志の^の字^字と^と略^略也^也樓^樓皇^皇と^とま^まて^てと^とま^まと^とい^いふ^ふは^は也^也

く^くら^らん^んや^やま^まと^と仙^仙源^源抄^抄云^云小^小侍^侍後^後が^がう^うま^ま鐘^鐘つ^つま^まと^とい^いふ^ふ

ま^まて^て記^記多^多の^の説^説類^類か^か〜[〜]と^と山^山蒼^蒼云^云け^け哉^哉と^と用^用語^語入^入り

河^河海^海云^云日^日本^本記^記皇^皇仁^仁天^天皇^皇卷^卷曰^曰俯^俯仰^仰喉^喉咽^咽進^進退^退而^而

血^血泣^泣懷^懷絶^絶无^无所^所訢^訢言^言云^云

實^實枝^枝云^云進^進退^退ハ^ハ力^力志^志ま^まの^のと^と云^云ん^ん之^之時^時度^度も^もあ^ある^るこの^{この}拍^拍

い^いふ^ふま^ま〜[〜]一^一云^云水^水座^座あ^ある^る進^進退^退ハ^ハ肩^肩て^て堪^堪忍^忍ま^まる^る之^之拍^拍子^子也^也

そ^そと^と兼^兼ら^らふ^ふま^まに^にほ^ほべ^べ〜[〜]一^一云^云拍^拍か^かつ^つひ^ひそ^そと^と兼^兼ら^らふ^ふ

ざる道りくも當時は皆まづまを無言のやうに用て
 たる僻りもや進退が中の或る處を為すは待て方よ
 成てより入てつらなるへ一人の我が儘に物を流
 するを志すはいよするといふにけ進退をさぐぬといふ
 るも通へるもと見えたり然れどもまを聲とよむへき
 じやせんといひ聲と用はへり天文八年六月十二日
 於議定所備談の時け角とやり了
 むだむだにらりー ちくくとくくもせす愁けけて行
 りがくかーきん
 百十九歳時
 ありありとやうとやういふてぬまぞ世中のむ祥あり

引争のららるるすいぢねといふて愁けけることむ祥の
 わあこあることけけることぬまをいぢけあへん
 ありぬといふよぬまらとあまら

弄ビ 琵琶行曰别有幽愁暗恨生此時无聲勝有聲云
 人しんズ我獨ノウラミラ幽愁暗恨ト云比巴ノ音ノ中
 ニ暗恨アルト也

かあつらぬぬ人のぬ程とららるるもかみりたり
 大人の娘とくもせむとさむひりら憂世のまをを観
 たり

かまがりせんともかかされど

前よ命婦河ちうよ

ねり現方水益者りまえりりやまは河とけり

大鼓とまかうらんのみとまろるをーとまろ 花鳥云

禮記曰鐘鼓在庭琴瑟在堂云延喜四年三月廿

四日覽舞樂仰左大臣時平公令推大鼓階前自

打之云今禁大鼓ハ必堂下にて打り也但堀川

院寛治六年六月廿八日敕之競馬ハ毒之時主上

堀河院自打大鼓はけ時置堂上也

あろまんとま 毛詩我狄是伐荆舒是懲中廢家直

とれし打とまろ

飛 雲乃中にりまむ梅のうかとを我もけりともよべるれ

よりあの人まうみりれけし水鈴やまひやりすくあうん

のまあらんもことつりとまよ

師 大人まろまろ年まろくかんすろゆへまひやりとあく

我まほへ好通をまけ河の年の戒ままろり

いそく 皇徳記云りろろの紙の玉よりまろ茶碗

の勢のまろき秘花まろまろとつろろと秘色とま也

河海云秘色磁器也云磁石似鍊

まむげらるまもろ 聖云 世界にわら柱のまを記して教とせり

尚書九卷無逸篇蔡氏傳曰上自天命精微下至

吠畝艱難閭里怨詛無不具載豈獨成王之所當
知哉實天下万世人主之龜鑑也

何らや

すまへ心實枝云者也の字や若手と

云河也

いのらぢふきね

莊子曰壽則多辱

さびらぬべくうら

万葉貧窮同義長歌及歌

^万世中とてうらさうそくたたむるものいあふ種な

さや

すまやと海氏の山と勢ふくし長恨歌云

驚破霞裳羽衣曲とあり勢破すんといふ也

おげんかまら

觀普賢經曰普賢菩薩乘大白象

鼯如紅蓮華色云世話鼻の赤と石榴鼻といふ

のりく

醫學正傳曰鼻者肺之外候惡寒又惡熱故好飲

熱酒者為鼻齆準赤得熱則紅得寒則黒

ち又字は傳あり五膏乃五字の中一二四ち三五ツ

と幸へ假名の事やうし

あゝ泥のふぢね

河海云

貂裘

貂

開如

拾遺曰中宮婁子うら泥のふぢねと高亮が拍盆道

横川は住侍ちらまつりうら

るあれどぬきしとよまれげるぢぬの月をきん

万
このへにふるもゆきや求衣クモイ扇アヒをあらず山は任人
とくへん常任トコニとよる也

一華云
礼記キク月令グツ曰ク孟冬クニウ天子始求衣クニウ云

花鳥云
江次第カハシ曰ク昔蕃客フンカク参入サンニ時重明親王シユメイシンノウ乘鴨カウ毛車モウシャ著カケ

黒貂裘クワシウ八重見物ヤチミモノ此回蕃客フンカク總ソウ以件裘テケンシウ一領イツリウ為重

物見モノミ八重大慙ヤチオホニハル云

ゆきもやされり
もれ女メは似おぬ物モノはナニ事コト稿カウ

むいゆきもやムイユキモヤ流ナリよとヨト也ヤ

花
洞日子ツツコす水のミヅ雲氷クモヒの

洞日子ツツコやけヤケきうらキウラはハんン朝アサのノさサひヒのノ下シタけケ氷ヒ

好忠集

洞日子ツツコの洞日ツツコの吳ウ名ナ名ナ名ナ

とよやうなる
實枝サネエダ云クけ洞ツツコの影カゲ畧リョク互見ゴケンの洞ツツコ也

かうやうめらカウヤウメラあやアヤらんランとトしシいイはハぎギけんケンうウとトあ

けケ二ニとト意イこコるル洞ツツコやヤんンをヲ付ツケへヘとト云ク

日ヒかカうウてテ見ミんンあアけケらラん
師云
源氏十七集ゲンジシチシツのノまマりリぬヌんン子コ

けケいイやヤりリのノ道ミチ子コ叶エへヘりリ艱ケン寡カ孤コ獨ドクのノ心ココロのノ窮キウ

民タミもモてテ古コ来ライ仁ニ者シヤのノ世セとト治チめメ給キふフまマ分ワケ上ノよヨめメづヅと

らラぐグくクむムとト也ヤとト云クせセりリ

名ナまマのノ末マタのノ

我ワ神カミのノ名ナまマのノ末マタのノ松マツ山ヤマのノ波ナミのノやヤぬヌまマさサとト云ク

浦をくわらきき白波の末乃松山とくしきでんら
 弄花おど初の字を用より 實枝云あまそらぐり用せ
 けき乃と海と又我りのさひのたゆらり多記といふも
 かりまらりしらの香 實枝云我神のなまし川末
 の松山の川字よ叶へり

ワ次めのいりくらくれれど 白氏文集秦中吟曰

夜深煙火盡 霰雪白紛々 幻者祇不散

老者體无温 悲端与寒氣 并入鼻中亭

霰思見切。暴雪也。不散。上ハ悪カラヌ心。一本ニ并

作併

細流云文集一。句いす人子風吹惹てかかともづ消
 まらりよ。いりつくら人まおき。地消て物かそら
 ーしりしもさひけおけ。もけ翁あどとんて
 神一はへり

花鳥云初者の句いり。にらり女よりそ人 老者の翁また
 とくしり體无温。い火桶は火と入てり。むらりまよ
 きへしり 實枝云鼻の字ハ姫君乃鼻よりそへてい
 へり眼と付へり

今足付ら終んとすべありあらず

今いやぐりくすべまうい仙源抄云無便之無なる也

せんくさくくすんきやうくや 實校同

世乃常ある程乃異らるゆりなれは海なる

如け孤獨乃やりあり候なりを聖賢乃水代と一

天下よまゆゆとまて上聞よまてしとくみ流しと

也 續見中紀等子委天下をまつらむら國をまじら

人のとくへますたり論終云居よ國急不継富

急と窮迫也周と補不足也

げよ志ふけいよねとそ 種姓にりうくね世の乃

理を觀しとほへり竟乃子竟子似と柳下惠と

聖人の先弟子盜跖といふ大賊あり

わつ衣君がん

え兵集 いつ我個いつきん唐衣君がんのつきかざりい

神まじりまんじん

淡寄 淡寄いよよいおあつそ白妙の神まじりまんじんはあま

今やうきれえゆらすましくつなまうしあめれらる 句

實校云い一句消のゆや

なげのいしんひしうこまやうなる 實校云 け一句い

もろのゆまわると織海のこほやあらんえ今葉之

御うた松殿將衣束抄云法成寺岡白直衣布袴紅梅

織物直衣紫織物指貫皆練着之寛弘元年二月

五日法成寺関白衣府行曲水宴主人着桃花直衣柳色指
 貫山吹出柏末久三年十一月十四日五節童御覽日法性
 寺関白紅梅浮文崩末指貫皆紅衣此時右今案說非破へシ
 まつゝ記さといふよ 河海「」今こそと刺ゆ

万人に
 よそいのこゝつやあひん紅の末摘花のさよひでせよ
 六
 人されどさへぐらゝ紅の末摘花のさよひてまん

まゝに記さ

古今二五記
 紅よそあゝんよほのまれず人をあくまゝにうつてまぢり

河海「」今こそと記さといふよとあり

細流圓之古今集の外記「」今こそと記さといふよ

かゝるまゝ人のすぢもあはれん

師云
 是へ命婦との終ふ初く末摘花の古交の飛鳥よて尚

世の作法もさる人すれいれや入勢末あゝん年と

にさあろろやとさう一模様あゝんくらゝき物や

うらゝきとんらゝいよと一挨拶するこそ公界とらり

人され命婦がまゝとくゝん記さう計とて実なる記

ゆへ末摘花も和とらまはとらん可とさうこそ記

しとて人の飛とせり

あゝくゝんあすぐさう 宗祇云方のわらひを

まゝに記さうとさう末摘花の意にやい新世子の

人の教也

たゞ梅の花の色のどとと笠乃山のし女とすくくともひ
求子の福のま多々良女乃花乃如加以祿利好
年夜賦紫乃色好年夜

河海云春日いといと笠山といふ餘社といふその
とくよく死鳥云求子いころめとありらとくとも
子の供より只梅の花よりとく供てくひつけたり
と笠山のし女とて推てとも常陸の文乃し女といひ
きのんくされと憚てくのはよく
毒氣一禪云東遊の中よ求子駿河舞あどふありや

室紙の口傳云くくひ物とらめとありと只梅のむ
とかくて深氏の流へり捨練の色紅や事摘乃鼻の
色乃赤といふんくくのくく事摘乃常陸宮乃姫君が
れびと笠山のし女とて推てとの流へ求子の寺い法社
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
りもせあていひくくくくくくくくくくくくくくくくく
肉才一宮の常陸の廉徳大明神之甲八代稱徳天
皇神護景雲二年よ大和國と笠山よ宮林初く迹
と金流よとよめりや

廉徳よりかせぎいのりて表目あらとくくくくくくくく
宮

かせぎの廉の一名を喜日里からと蓋山之古来秘
鏡也

あまねを誦る中

拾遺

長だま中にありしころ此のねを誦る中
紅のあまね

秘い人も老女に古代のものもぞいふね也

當代のゆい何れありともいふねの也

可くはうり 公事根源抄云云五代天武天皇三年

正月に大極殿に渡御あり男女を別園夜臨幸

ありて十一代持統天皇の時に漢人唐人を臨幸

と奏して十代聖武の時に臨幸しとて録と云

仁義礼智信のふ字と短冊にまて人にいふとせ

仁の字とす 滄義の字と録礼の字と綿智

の字と布あきと又同也字位下の人も

と引てとて云

何れもき年の娘かきしとて人まてあはれ也

孝代桓武の延暦十年に作てしとていふとて

十代男臨幸十六日女臨幸の臨幸節令 宣命講点

うらぎ汁であやしとてあやし也

鳥と源氏のゆきと實枝云これい末摘花のゆ

あり次第へんし志すは源氏なり終りしを物とせし路なり
能くは源氏子對して終りしもの計は和終べきも
上忍斗とて和々愛せしめて下忍の何れとひ終りぬと
是れ山のそとれりてさるる

海にうゑのいづとて

言の年立うら細り海にうゑのいづとて

えはらまゐり 源氏の何れたまらんとてうらまゐり

百ふりていづらまゐり物とせしあつたまれが我ぞうゆ

夢よりとぞんら

ちてい夢より我思ひのいまやあつてとてとんら

もぐらの 山海經曰東海有黒齒國其俗婦人齒

悉黒染云日中の東海の中乃國の俗はあつぬとや

平仲がやうよ 花鳥云平定文字の平仲とらよ

字源大綱云物類云平仲 定文 八女のいづとて

まねとて硯の水入とてあつらひらして目とあん

ぬりてうらとて女んえて墨とすりて入らうらとて

で又ぬりて女鏡とせしやあり

我子もつとてまがんとすれ人子すつとてかのか
大和物類ありき 山茶云鼻は紅粉の何れやう
にうら皮斗は源氏を糸とのとてねとて平仲があ

つねとさうに似せぬものぞ

あへん 思ふに似ねへきとく 似

毛詩十二卷小宛篇曰教誨爾子式穀似之 古点

爾上聖徳ノ人也子ト天下ノ民也王ト天下ノ父母

トシテ親ノ道ヲ失タズ民ガ子ニ成テイホトニ徳ヲ治メ

位ヲ堅セヨ也民ヲ善道ヲ以テ教ヨ也 螺蠃ニ似ラレ

ヨ也又オンモ似ト也アヤカル心也

りふこ 索笑梅と杜子美が待子作り閑をひら云

句ふねどりふこ梅の花とそ我れりたりかりて海は

け奇け春はも前春はあり再花も雪ははてかづから

うくく 花鳥云廿八代孝天皇仁和年中

河内幸の次幸八條院為作寄御輿之便初造階

隠見吏部王記天慶六年也。今業南階の百

櫃と二がくく上と書出と階隠と云鳳輦と東

向より記すてたの服より糸御下御ありんる

かぶ人のすゑくつありん

一苑堂云是の源氏の花のや天下國家のあり

仁ありて見聞のともふ所に民を愛て急あつと

救済の万民これありて國風不言正くあり

と下なることいふくするも源氏の花はあつ

天下の親みやよりり流ながるべきもさやひあらずけ一言ひとことは
てあられり

紅葉贊

け巻まきよぬふのづとつきる詞ことばあけ宴のぐんと夜よ裏うら葉は
のぬ巻まきよけ時のときをぬふのづとすけり是を以もつて巻まきのぬ
とす源氏十七乃十月より十八年としの七月までの
ひみそり

行幸ぎやうこう 天子乃ゆきまるまるまるま幸さい何なにららしししし子こ孫そん也

實枝じつえだ云晋灼しんしやく曰民臣たみのおみ被か其德そのとく以もつて為な為な徽倖きせう也又師古しそこ

曰幸さい可慶幸也故福喜之事ふきのこと皆稱みな為な幸さい云

帝みかど乃行幸ぎやうこうといふ法しふほふ院いんの御幸ごさいといふ和わ奇きと
こあらみゆきとよむよむ之代このころ院いんの御幸ごさいと朱しゆ蓀そん院いんと

号と流津示へ桐壺帝の御幸也

かづのよゑ 師云礼 樂とて世をわきあはれしむる要の

るはて乱世治世と云う道と云ふもの也

あいなごうしほよ

師云 師云 郢曲也元稹梅詩郢曲琴空奏云 文選宋玉對楚

王問云客有歌於郢中者其始曰下里巴人國中

属而和者數千人其為陽阿薤露國中属而和者

數百人其為陽春白雪國中属而和者數十人引

商刻羽雜以流徵國中属而和者不過數人而已

是其曲弥高而和弥寡云郢ハ楚國ノ都也コレヨリ

歌謡ヲ郢曲ト云

かきうひんが 翻譯名義集 二曰迦陵頻伽此云妙

聲鳥大論云在 中 末出發聲微妙勝於餘鳥正

法念經云山名曠野其中多有迦陵頻伽出妙音

聲如是美音若天若人緊那羅等無能及者唯除

如来音聲云

鉢の 可 大鏡云みどりくゆりまをぐる同君也

の大升の御幸に富士の文と云の取版の款五惟

明の七歳はて 辞 まるせはてりーづりのより也又

あくゆり 就 人まがれぬ人ゆりづりきぬら

の莞やうにうつくしくもせはひくふ山林めど
とりなりきき大鏡三巻あり世継物鏡丸云帝十
七代のことと申すや

つの子 河海云良家子や若菜巻よ村せ月子
朱雀流乃好幸何るべしとて舞人あどやんと
あれ家の子やと

榮花物語廿七東三條院沖賀舞人家の子の忍道
やしと細流云堂上乃人そよ至徳記云良家上八掛家
以下上藤ノ家ナリ

あらるの回くつとつと紅雲のほやさうく
實枝云一申云試樂の回くつとつと紅雲のほや

まろぐーくんとあり青表紙よ不問し

何かりし 書尾よ至祝珍重なり申すとて也無
恙乃字戦國策よりあつと無子ありと祝とつ詞
完と賢開て恙のまかりと也

有識とむ字也禁中のゆのこあつと
方に故實と申る人と云て武家より馬とつ方
の子ありと云ふ有識とつと法藝と申るゆ

つりあや 花鳥云俊頼す
時鳥二村山を尋らん入あや乃夢やうつ海らや
顕昭云舞は入綾とて文字取てあつと面白

子よせて時々の入後の勢やまさりとよありんま
河海云舞有取後と故云入後と師説舞とて樂
舞へ入時と詔へかへり見て舞かむらと入後といふ後
紋わりてうらうらききり目と後といふ也

ふらうらくまの人のやういふみの結く細くあく

夢上のうめききりあきうらうらうらうらうらうら

源氏も裏表あく打くうらうらとついで夢上の料を

いひてはら好色は深きなりいひたり流るす我が印

うさうて人とたすといひあらずんごもいひら

力の悪きとどかたりうさうて人の罪とのいひ

の戒也

おらひ流る 醜 仙源抄 宗碩云義廉の心

つらうあやゆらぞりりまれば 師云 源氏の書物より

我々をとり流る也

いづく母らん之月を 何ぞきかへん 物忌令曰祖父祖母又

方者暇二十日服立月 母方者暇二十日服立月

あいきやうづき 仙源抄云 愛敬付 愛敬付

ワガンのあまうらあすいさく振られまらぞう

是がからのもろれら初と妻いかに 妻いかに

持てはあしとらんらんあきあきあきあきあきあき

男よわさあらむはかり大争日欲所其家者先
 脩其身欲脩其身者先正其心正其心者先
 正其徳正其徳者先正其徳則天下大平
 矣是ゆへに深き一むべき也

男乃つづま

後撰 意ともよべき人の心をやえて男乃つづま成ねは
 弘徽殿おのけしげま 東宮の母女御
 やぐへ辰とあねら人をいぢぢぐへ辰妃の徳なく給ま
 しきま帆おれごとそりてはつて詞也

水乃鬼

謙徳公集

うらつるよこにけき一れのつらふらふら鬼のみんり
 ら乃鬼といふらんあつらふと人の推量せん
 らぬらんぬまもよとば病をいひむせよ
師云
 人母は後てうらな後悔する事をつら人の中
 らん苦悩よわらうずむ存や外物よわれて着念
 のしよさら時をいはずまきこりすまきこりのるむ
 中んのあきつらあり後まけしてそまよ身まあこ
 後べかの災とあらうきこり万事よ付らぬけあり中
 身ん事よまらひの雲の心の後とくつらういふ欲

禮記樂記曰人生而靜天之性也感物而動性之
欲也物至知^レ然^レ後好^レ惡形^レ焉好^レ惡無^レ節於^レ内知^レ
誘^レ於^レ外不能^レ反^レ躬天理滅^レ矣滅^レ天理而窮^レ人欲者
也於是^レ有^レ悖^レ逆^レ詐^レ偽^レ之心有^レ誣^レ泆^レ作^レ亂^レ之事注曰
人欲言無所不為

いづれはよむいづれはへる整りまてけせよかろ中の
へんぞ

師云 整りといふはよ整^レとくすられけせよほらやみ
前^レせよと整りつらねと親^レと子の清^レく人
史婦又親^レ子よりとくくきむれ地^レたれた親^レ

ろじき義よとくがくは万事一^レ天地より懸^レ隔^レ
ありのやとあり

父の可^レなりなれらる海

師云 教^レ壺女^レも深^レ氏^レまうけをあらていんし流^レえぬと
けぬ人^レ万事^レにたひらる人^レの迹^レをれた好
色のなまわくはる程^レとくくありをさるで
人の戒^レとせり

しうわがらうらうらも打^レけびつひ流^レをす
教^レ壺^レのらとく深^レ氏^レの媒^レせり合^レ婦^レとせり
あく教^レ壺^レのらとくも合^レありきさ大

子の使せし一也一せのめらひとありしと云ふ
也令婦も外様にもなるとや 石義の忠節は常
にいと君の心こよ叶へども終るは絶へしと云ふ
これまらさし古今例なり

調行 仙源抄

ひのほろくありし 師 石壺乃文一せのりのさ

とあせりり一密通ありしはらがるも母子のな
たあら病もて天下万世のものもひらんとすを
げきくいぬも常の物もたれりし賢い
一めらゆも一せ奉平や平人目とあり

石義也と知あぐる恩事とするゆ一せのもの
いとありてやまれば

かきら一もかきけあくもれくの長も

け初のつきに大孝に如切如磨 如琢如磨 慈号 個

今赫兮喧兮と入り又現也

とありし 無別 日本記

と入つてんらに 新古今十六雜山 贈皇太后文子

そいて書文よまふひらり時少将義孝久まのり
らり子撫子の花よつけつらり 恵子女王
よ入つてみせど落たる海にうたへんき撫子の花

花子内うあん

河 花宿子ま印 接子うーも花子内うあんをへてらん
ききりりむりり さいせくさー一筆之門守に縁の羽に

塵さばす人トもさあまーうり妹とわづめる 塵さばの花
入ぬり磯の 入ら目まればとよふと

河 志かみえへ入わら磯の草あればとくすくはく 磯の
入ら目まあへつ

亭 伊勢の蟹乃 洲さうさへらうておんあはんとあへうーと
けうのしとあはれりそとのたへるん

花鳥云 箏秦聲也世謂蒙恬為之 法有十三象

十二月其一次象圖也 自一至五大法と云自六至

十中法と云 自斗為至中と細法と云 中の中のりを
中やと 弄花云中のりを 滴巾巾之細法より程を

此のくけ 怪弄花よ委ー 十三法のうぐんやうん
一三三やめ六七八九十斗為巾くつひけり

うやうて 幼少より 糸短を及かるとよとー
やりてや

ふえ吹ありー 樂の第一あくてふあふ守第一つ
てすうらひく 第一あつてふあふ守第一つ

わきろくせり 保曾呂俱世利とん 長保樂の

破く言師云拾芥抄云長保樂の高麗一調の中中ありゆれ平調の曲曲ありど但りて調調とありけりこと心得べし

ん
及及とこれと云ゆ師云拍子拍子やひやうと及せらるる二宮
一一と云ふ

され一日も見まはぬ
毛詩曰一日不見如

三月

中牟抄ひを老仙源抄

女藏人女藏人石月抄の点也

かうやうのころえすぐを給す

是傾帝の好きとさう傾や傾おとさす

後のものともなひけりゆれゆへ傾はよめ

源氏源氏の好き也

尚書八卷酒誥篇曰人無於水監於民監

こハ古賢ノ語ナルヲ威王ノ引出タリ水ハ人ノ教

醜ヲ見スレ善思ヲ見セス下ノ仁義ヲ好ム時上

ノ心コレ也ト下ノ暴虐ヲ好上タル人ノ惡ト知心

今惟殷墜厥命我其可不大監撫于時

殷トハ紂王ヲ云命トハ天命也紂ヲ戒トシテ成王

下民ヲ撫安スルト也 紂ガ好色昼夜ヲ酒ニ沉湎スル故ニ万民モ又如此スル故ニ天下万民ニ戒トセリ 酒ハ祭ニ少用タリ常ニ人ノ氣ヲ乱スユニ戒メトス 法ニソムキ酒ニ乱ヲハ刑罪ス

肉侍のすけ 典侍也 典侍とてかしてすけ殿

といふや 老女の好色とて人ノ戒とせり 前子帝の四年 老をせ給ひぬれどうやう乃こと云伺 子老男の好色と戒よりよきと似せて下の故ととんらん

あまめけて 媚 仙源抄 艶やきき 狎と子

かえり 至徳記云 蝙蝠也 扇の異名也

山麓云 斐乃扇の異名也 今の事廣や 其常 子扇とりつゝ良とくらんぬや

森の下くき 引寄とほろぎとらじや 山城乃淀

みあらしぬふや

大荒木の杜乃下子 けいぬまひの約もすいあす 野人ほ

本林とて夜の

ひまともく 海りより 大荒木の杜とて夜に 陰いふりれ けいぬのいなる 此陰にけいぬが 知らるるや 油涼の之 弄花云 肉侍が 野人もあしと 述懐しとらるるも

あられ淳く男乃地ついでとや

君一とたなれの跡花夏小所

我門の一ひし落りかかん君がま洲の跡もこぬ

向さげん人やさめん

隙さげい薫るまめ草拵の跡もつくある森の下暗黙日記

まぶかふりのとこ

黒髪子とら髪まじりかふるまじりかふゆゆ扱上神女

くく櫃とくくみ

津必乃長柄の橋はく櫃ありあらふと出りなれ

くかめ人ゆい

くくくぬ人のこせくらぬ世まぬさひあぬ今も家ん細

くくくぬ人乃ませくらぬ世まぬさひあぬ今も家ん

温明敵 花鳥云中の重乃東の方にあふ敵え内温明敵

ふのまますふくま 中重 名有抄ノ兵

公事根源抄云内侍ふくとく三種神器乃そ一也

ふもや少す神代子天照太神の天乃般名戸と閉て鏡

行い多ら時石凝姥と神の鑄らく一はふ日神の

以政の鏡也是と八咫鏡となつて後比神代三

代の天津彦彦火々瓊々杵尊の葺原の國の國

ろと成給ひて天降給ひ一時天照太神みづ

三種祓恙と授けよとて川鏡といふ者とんらがごとく
 せよとの語い—や代々帝傳て實地と—語い—
 人皇十代崇神天皇の川鏡を傳へて給へて祓儀
 よりつくり—川鏡といふ伊勢五十鈴川に崇
 たら先則今の伊弉皇大神宮也—の新造の御
 鏡といふ伊弉皇に置りし十一代垂仁天皇の川鏡に祓
 威と恐を給へて別府に安置りし温明敷と云
 川鏡のす—す—水と肉の和とも賢所とも云々
 賢所名目換

瓜つくりよきりやまふす—

備馬樂 呂 山城

山城の狗の血乃瓜作あやら—あやら—あや

瓜作。瓜つくりとれ

瓜作我と川よふいんせんあやら—あやら—

あや。いんせんとれ

いんせんあやらとあやす。瓜の血とあやら—あやら—

—あや。瓜の血とあやら—

一瓜あやら—あやら—あやら—あやら—あやら—

二瓜我と妻よりきこえ—二瓜瓜作の妻よ

ありとも成也とあやら—瓜の血とあやら—

弄花云折花瓜の時に多れは徳や源氏と云へが不
可なり瓜作の早者の妻となり成てさひと云へ
秋にせんをよみ也

つらうにありけん昔乃人 青表紙のせくの

白氏文集第十日夜聞詩者有鄂州

夜泊鸚鵡洲 江秋月澄徹 隣船有歌者

發調堪愁絕 歌罷迷以泣 泣声通復咽

尋声見其人 有婦顔如雪 獨倚帆檣立

娉婷十七八 夜淚似真珠 双双隨明月

猶向誰家婦 詩泣何悽切 一回一露巾

低眉竟不說

鸚鵡洲鄂州の内あり悽切なるを

細流云十七八の年よりす只和歌めと云ふ尚ほ

よそくさひ出流ありて一と云ふ河内守親行乃也

はい又君といひんむりの人となり花多喜観の

是子同せり史記云卓王の孫又君といふ女あり新

寡好音司馬相如以琴心挑之と云ふ女の氣色と云

より文君夜に奔相如と云ふ女乃と云ふ乃より卓

文君八年よりて司馬相如よりあられて白頭吟と

云秋とつらう相如と云ふと云ふ衣とさひ一也

源内侍乃すけの年よりて人のりてあねねあり
一により物汝の他者引をせすよりべ一鄂州の女十
七八あり源内侍がきこさるる数もすくべし一但
女乃秋と樂天がす一公似より花を

あづき屋と 催馬樂 律 東屋

一正あつち 四門の兩下乃あまり乃このあまぞとに流らぬせぬ

けすひくせ

二正 二すぢいもたごしとあづきとあまのんのはとれうめ
とひくひそきませ我や人妻

四門といわまざり官がへけけや。兩下ハ兩方へ落

あまざり之雜念やあまざりハ軒之戸の戸也

つとぢいいたごしとあづきとあまのん

けすひくせ乃剛子とひくせ

け君のさう海めざらさ一て常よりとに流す

何とこの 源内侍乃好色好るべしとて常より源氏の信ら

くくめりて我に好色あらとて人信人他の信ら

れとてあひつひつすれはまが力もあつたりのなる

事とさるぬのそくや

易天火同人ノ卦 三三三 九四乘其墉弗克攻吉也

コレ八九二が九五ヲセメテ六ニヲ取ントスルヲ其ハ非義

ナリトテ九四ガトガメシガ結句ソレニ習テ五ツセメテ
ニラ我がモノニセント違義傷理ナリ是ハ衆ノ不与コ
ト、非ラ悔タラハ吉ナラント也是ヲ人ノ異見ハキ、事
ニテ我ハ同ク悪ラスル也ヨクツ、シムヘキコト也

すりのかこ 修理大夫と事 大夫権大亮 亮権亮

くもろあちまひいちりつらん 衣通娘乃奇

ワガセニグクベキよひこまのらもろあちまひ愈えちりも
せに男女子通上てよふこ二十代元恭天皇の妻ハ衣
通娘ヤ后宮乃いりうとこ是は蜘蛛とんてちふ人
のまらと愈え知ととあり

つむめろ衣やのりおんしうかやくころがる申乃衣子

師云

源氏の好色の名りころびのどくりきんと也既申
おの好きと常よりおんはゆふ迄也事と離る
理ハ益あり又理を離る事ハ佛の煩惱といへり
道ハ理の也それだ事とあらぬは公証ハ事ハ
付て賞罰の感をあらうに終るおの理は計る
と至道と守

しんまとりきび 引下向とぬやわころい直

衣とよまきび遠あちまび

河なほの濃深の衣志子引てしんまとりきびちららんも

志げなすごい 師云 源氏御守持せよとてしつら詞也

おぼしき年つらきとて大人にせぬやと好む乃
らり出たり獺の戯と和弁にふりし獺が初たふ
きて好まぬとたてし合えて手子死すと云君
子の戯をこれのやと御守持せよとてしつらね
るに源氏の戯とて修理大夫に付くは妻敵と
とて大事あらべし戯はもろ子叶らるのいふ人
の妻と密會し財宝とぬきとあどく戯やと
りふとも必罪科すのこあらへし
君ららりくは付られぬら 師云 昔より人の志す

此と云ふより災出来て後悔しともかへしぬ故に
乃初に君子戒慎乎其所不睹恐懼乎其所不聞と教
らせたり

そこのあつらふ 師云 皆つらけれらとの心

おぼしき後をきき淡川底もつら子成ぬと云ふ
河内 袷袖 端袖 鱗 裏のひれ

ありとてみざる人いひかへし海に記しはつらんと
つらぬんかあられ流す

け詞と記べきあまけねとていふ人毎に年よ空同
よんても力な當りて大ゆふ及びの用とせぬ也

禪の地獄乃話よ崔昂中回趙州大音知識還墮地
獄也吾師云老僧未上去已是大音知識為什
麼入地獄師云老僧若不入地獄爭救得師中云
直入地獄入てよまらぬ救とあるぬら子同

中とんがとや 催馬樂 呂 石川

石川の高麗人子帯とられてかたにいとら
如何る如何る帯を花田の帯乃中へ絶ら
かやうりやうり中へ絶ら

クヒスル後悔也花田ハ浅木色ト名目抄ニアリ。中ハ絶
ルト八千ギレタル帯也。カヤルト八人ニ物ヲトラスルヲ云

花鳥云二藍乃帯あれ奇し花田乃帯のと録
あふせり又帯とられてかき悔すも便あら
ゆへに花田とあり

東海乃乃のくさる帯法帯かどづりもわんと
是帯にかどいせあり但帯法帯のかどい少のゆ
い帯のかどいからゆ
えのれを法と
師云 源肉宿と源氏君子
しとん付あつとよいのちやまきとつて

この山なり

古 大上乃鳥籠山なり不知哉川いそきてワケなめし

師云
 河州大上郡名也けり古今集以雲賦多乃内は
 あり三乃向名取川とあり天智天皇の近江の采
 女は孫へらとあり

帝ありを色治えん所つふ

師云
 天文八年五月廿九日於禁中講し時け河不狹と
 細流ありけ哉思らくい非平太子すくして禪位
 行六和漢女子目出度りすとそとらむべきも
 けりあどい物結い流るにやけり世はあらるれ
 乃理とまて人のとへせり今きく人いりの
 為子作らりいあど初相壺巻より帝の功迹の

ありはもととちり一弘徽殿女御のさぶあきんとせ
 一乃中一忌と敷ゆい帝の寵をの目れ出ら
 相壺更衣と云初に死去せしめ帝の心とを慈敷せ
 一心然者一命とくうて帝の御前あてはて
 相壺巻の氷代ふむすきもやその上書よむひて
 つまぶと禮記あり
 云文乃母よて廿余年は成迄へり女御と云ありて
 けりありはひてはれとや一と例のやとくどせ
 人もやえたり

師云
 河州帝とく一とちり東宮の西子出きて世と次

三十一
流るべし 別の子も此阿の連枝に位をゆづり流るる
るべし 物らも夜壺と御と御をゆづらるるや
と定流の弘徽殿世濟の人より先子入内ありて第一の
皇子と云み東文坊の母よりますますと云て
好子入内ありし夜壺と后子立流るるをよがせ
儀と云むき流るる弘徽殿のうらまは安らむと云
世界の人も依怙頼負ありて流るるをよがせ
さしと配代乃帝も好色と云は流るるをよがせ
飛也

